

貸間を探がしたとき

小川未明

青空文庫

一

春の長閑な日^{のどか}で、垣根の内には梅が咲いていた。私は、その日も学校から帰ると貸間を探^さがしに出かけた。

その日は、小石川の台町のあたりを探がして歩いた。坂を登って、細い路次^{ろじ}にはいつて行つた。赤い煉瓦^{れんが}塀^{べい}にいたり、壊れかけた竹垣に添つたりして、右を見、左を見たりして行くと、ふと左側のすぐ道ばたの二階家に、「貸間あり」の紙札が下つていた。

私は、先^まず外から立つてその家の有様を眺めた。古い家で、四角な、そう大きな家ではなかつた。そして、二階家といつても非常に低くて、背伸^{せのび}をしたら、二階の内部が往来からでも見えそうであつた。思うに、その家は、可^かなり低地に建つていたものと思われる。何しろ、私が学校に行つてゐる時分のことであつて、もうかれこれ二十年近くの昔になるから、はつきりとした、その時の印象が浮んで来ないのに無理はない。しかし、その壊れかけた垣根のうちから、外の方へ差し出た梅の枝には、ぽつらぽつらと白い花が咲いていた。私は、とにかく入つて、その室^{へや}を見ようと思つた。そして、入口から声をかけると白髪^{しらが}

の爺さんが、庭先に何かしていたが、

「どうぞおはいり下さい。二階ですから」と、言った。

私は早速家にはいつて二階へ上つて見た。畳の汚れた、天井張りの低い六畳の間であった。外から見た時には、南に縁側がついているので、暖かそうに、日がよく当つていて明るそうであつたが、室の内にはいつて見ると何うした^どことか、陰気で、暗っぽい感じがした。しかも窓が、東の方にも付いていたけれど、どういふものか氣持を引立てなかつた。

「この室には、はいる氣がしない」

私は、ただこんなことが念頭に浮んだ。そして、爺さんが静かだとか、日がよく当たるとか、学校にもそう遠くはないと言つたことなどを耳に聞きながらも、私は、しばらく黙つて考えていた。

「また、よく考えて来ます」

こう言つて、私は、その家から出た。そして、他にも、貸間はないかと、方々探がして歩^あるいた。他にも、好ましい家はなかつた。しかし、私は、思い返して、二たびあの二階家へ行つて見る氣は、どういふものか起らなかつたのであつた。

ある時、Bの室で、二三人学友が集つた時、貸間の話が出たのであつた。やはり、みん

なも貸間を探がしていたと見える。

Nが、電燈の下で、眼鏡を光らせながら言った。

「台町になら、一軒二階で貸間があるんだ。まだ、きつと開いているだろう。長くいるものがないのだ。ぼくの友達も、あすこへ行ったのだ。移って行った晩だね、夜中頃に、ふと眼をさますと、女が室の中を歩いているのだそうだ。青い顔をして、俯向いて、隅の方を足音を立てずに歩いているのだそうだ。友達は、自分は、夢を見ているのではないかと、気をしっかり持った。しかし夢ではなかった。自分は、幻想を見ているのではないか？　と考えた。しかし、眼にはつきりとその女が見えた。友達は、恐しくなつて蒲団を頭から被った。そして、夜の明けるのを待った。

夜が明けると、もう、一日もこの家に居ることができなかった。それでね、早速荷物を片付けて、前の下宿へ帰ろうと思つて、そう断ろうと梯子はしごだん段を降りると、爺さんも婆さんもないなくて、十二三の女の子がいた。仕方なく、その女の子に話すと、

『やはり、何か見えましたか？』と、女の子が言ったそうだ。

『じゃ、僕ばかりではないのだね、この家へは幽霊が出るのかね』と、友達は、聞いた。女の子は、笑いもせず、じつと友達の顔を見て黙っていたそうだ。

友達は、すぐに、その家から越してしまった」

私は、この話を聞くと、あの二階家が目に浮んだ。

ほんとうに、そんなことが、この世の中にあるのだろうかと思った。

一、二年後であつた。私は、其処^{そこ}を通ると二階家が見えなかつた。垣根などが新しくなつていた。その家は、壊されたものと思われた。

二

私は、この世の中に「妖怪」の存在を否定する何もものも自^{みづ}から有しないかわりに、また、「妖怪」の存在を肯定するに足る程の実験にも触れて見ないのだ。けれど、「妖怪」以上の恐怖すべき光景に接することがないではなかつた。

この一つも、やはり、学生時代に、貸間をさがした時に見た、光景の一つである。

関口の滝の附近に、黒く塗った壁板には、武者窓が附いている、古くからの家があつた。しかし、それが外部から見ても陰気な二階建になっていた。一軒の前に「あきま」の紙札が貼られていた。

私は、ここんではいられなければならぬ、くぐり戸の外から、「ご免下さい」と案内を頼むと、「なにご用ですか」と、つんけんどんな、婆さんの声が内からした。そして、誰も出て来なかった。

私は、最初の印象が、すでによくないと思った。しかし、こちらから案内を頼んだ上は、仕方がなく、

「あきまを見たいのですが」と、言った。

「おあがんなさい」と、愛想気のない調子で、おなじ声が答えた。

私は、すべりのよくない障子を開けて、窮屈な土間からかまち框へ上った。すると、奥に頑丈そうな白髪の老婆が、恐しい眼付をして、こちらをじつと睨んでいた。

「どの間ですか」

私は、もう聞かなくてもいいような気がしたが、やはり行きがかり上から言わなければならなかった。

「二階の六畳ですから、ごらんなさい」

婆さんは、起たとうとしなかった。

私は、家へはいると、外で見たよりも、一層いっそう陰気を感じた。そして、急な狭い、暗い

梯子段を上った。つきあたりの六畳を、これかと思つて覗いた。壁は処々壊れていた。新聞紙などが古くから貼られている、色が黄色くなつていた。そして、畳の表は、すでに幾年前に換えられたのか分らなかつた。襖でし切つてもう一間あるらしかつた。

その室は、どんな室かと思つて、私は、廊下つづきに並んでいるので、隣の間を覗いて見る氣になつた。高窓から、鈍い光線が射し込んでいた。私は、其処を覗くと同時に、苦しそうなうめき声が起つた。蒲団を敷いて三畳の間に、女が枕を廊下の方にして、仰向になつて臥ねているのであつた。もう長いこと臥していると見えて、黒い髪の色は、つや氣がなく纏もつれていた。そして、両方の頬骨が高く突き出て、眼は底の方に落込んでいた。血の氣は全く失せて、顔の色は、白い花卉のようであつた。女は齒むを露むき出して、痩せた体を悶もだえて、肋骨を二重に折るように、うすい蒲団の下で波打たせていた。

「あ——つ、あ——つ」

病婦は、他人が覗いているということを悟る筈がなかつた。こうして、独り苦しんでいた。枕まくらもと許もとには、痰壺が置かれてあつた。

私は、逃げ出すようにして下へ降りた。外へ出るまでに、殆ほとんど発作的に、「あの六畳の間ですか？」と、言つた。

老婆は、冷淡な顔を上げて、やはり座ったままで、「そのうちには、隣の三畳もあきます」と、言った。

私は、無言で外へ出た。そして、茫然として、ある戦慄^{せんりつ}を全身に感じた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「中央公論」

1923（大正12）年5月号

初出：「中央公論」

1923（大正12）年5月号

※「歩ぬい」と「歩い」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「貸間を探《さ》がしたとき」となっています。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年6月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貸間を探がしたとき

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>